

オリーブジャパン国際開発協力協会

# OLIVEPRESS

Vol. 1  
新/オリーブ  
企画編集部  
1996/1/28

OLIVE JAPAN ニュースレター 創刊号



## 人間の尊重のための無償の心

ーオリーブジャパンの活動から見るー

アンジェラ・ヴォルペ

はじめに

オリーブジャパンは1992年1月に設立された国際開発協力協会です。NGO（非政府組織）で、目的は開発途上国との国際協力です。

名称「オリーブ」とは、聖書から借りた名前です。平和の象徴を意味します。『創世紀』に記されているエピソードによると、神は人類の悪意を見て、洪水によって人間を地上から滅ぼそうとしますが、善人の一人ノアとその家族を救うために箱船を作りそれに乗るように命令します。洪水は47日間地上を覆い、「ノアはさらに七日待って、再びめばとを箱船の外に出したが、夕方になってめばとが彼のところへ戻ってくると、くちばしにオリーブの青い小枝をくわえていた」（創世紀、8、10-12）とあります。そのオリーブの小枝は神と人間の間、そして人間と人間、人間と自然の間が再び結びつけられた友情の絆。オリーブジャパンの理念はこれだけです。人間をちょっとした「原子の集積」にすぎないモノとしてではなく、肉体、心、理性、霊あるものとして尊重します。

オリーブジャパンの誕生

オリーブジャパンが生まれたきっかけは、イタリア人の教師ジョヴァンニ・リヴァと私の間のその友情でした。現在、ジョヴァンニは53歳で5人の子供の父親です。20歳の時から教育に関心を持ち、1972年に人間が人間らしく育てられる学校を自ら始めました。イタリアでも公立学校のレベルは低くなり、その中で教育という難しい仕事の価値を信じて働く教師は少なくなりました。ジョヴァンニはわが子を大切に、自分が教えたこと（自由な意思を持ち、他人を尊敬し、真実を求める）を学校の中で忘れてほしくなかったのだと思います。彼はカトリック教徒で、カトリックの思想に基づいた学校を創立しました。しかし、それはまずカトリックを宗教として広げるための学校ではなく、人間を人間として育てる習慣を提案した学校です。カトリックの中心は神の愛です。神は人類を愛し、人類の中に普通の人間として来て下さいました。そして、人類の模範となりました。正義、平等、自由、愛、赦しの模範。他人のために命まで犠牲にする模範。新聞記者で作家でもあるジョヴァンニが初めて中南米を訪れた理由は仕事のためでした。メキシコシティの学校で哲学を教えながら、1980年より中南米を国から国へと旅し、その国々に関する政治、経済、教育などの知識を深めました。しばらくイタリアに戻って、友人たちに見たことを語り、彼らと共に開発途上国への援助活動を始めました。メキシコシティでは彼自身が専門学校を創立し、エルサルバドルでは、知り合った若者のグループと共にストリートチルドレンのための活動を始めました。

私がジョヴァンニと出会ったのは1981年9月。ちょうど彼はイタリアに戻り、19

80年、南イタリアで起こった大地震の被災者のために援助活動をしていた頃でした。私はナポリ東洋大学の学生でしたがボランティアに興味を持っていました。イタリアでは、ボランティアに興味を持つことは特別なことではなく、その精神は日常生活の中から湧いてくると思います。「隣人愛」が昔から教えられている国であるため、そのキリスト教的な価値観はまだ残っています。例えば日曜日に、老人ホームまたは孤児院を訪ねてみると高校生がたくさんいます。もちろん、施設の中にいる方々の親戚ではありません。彼らは専門的な仕事はしませんが、独りぼっちになったお年寄りと話したり、家族を持っていない子供と遊んだり色々と教えたりします。これは普通のことです。私もその一人でした。そして、ジョヴァンニ先生に出会ってその指導を受け、色々な活動に参加させていただき、学生時代は非常に興味深かった時代でした。その時に始めて開発途上国の状況を知り、先生と他の友人らと共に、韓国、フィリピン、インドを走り回りました。また、イタリア国内では外国人労働者のために活躍していました。

1990年に私は来日し、名古屋聖霊短期大学で教えるようになりました。イタリアから離れた私は少し心細かったのですが、ジョヴァンニはこう言いました。「人間はどこにいても人間です。あなたはこれからたくさんの方々の責任を持つようになるのだから頑張ってください。あなたが学生だった時に大人から習いたかったことを教えて下さい」。

日本の若者と出会って一番目立った特徴は「無関心」でした。人生に対しての無関心。他人に対しての無関心。何も不自由のない国に育った若い人たちは、どんな素晴らしいことに会うことができても感謝できません。すべては当たり前のことになってしまうのです。健康、お金、食べ物、仕事。物事の意義を探さず、社会の流れに合わせるだけでまるで理性と魂は麻痺しているかのようです。

幸い私が担当している科目の中に「国際文化序説」があり、この科目によって少しずつ学生に近づけるようになりました。なぜなら、国際文化を理解したいと思うなら、まず「人間」を理解しなければなりません。この「人間」とは、理論的なものでも哲学的な議論の課題でもありません。人間はイタリアに生まれたこの私、日本で生まれたあなた、アフリカに生まれた彼女です。しかし、もし私、あなた、彼女は、同じ人間として同じ根本的な価値観を持っていないなら、どのようにしてコミュニケーションをとることができるのでしょうか。正義、平等、愛は、好みの問題ではなく理性が認める真実の問題です。しかし、20世紀の人間は曖昧な生き物になってしまい、すべてが自由の名によって可能になった時代に生きている人間は「真実」という言葉を拒むのです。「好きなように生きるんだ」というスローガンが今世紀の掟となりましたが、それは結局「勝手に生きる」ということです。他人が困っていても構わない、自分を破壊しても構わない時代になりました。ジョヴァンニは若かった私たちにいつも繰り返しました。「自分の中に潜んでいる良心の声を聞きなさい。そうすれば何をすべきか分かる。問題は好きなように生きるのではなく人間らしく生きることだと思う」と。人間らしく生きるとは人生の喜びです。しかし、その喜びを得るために自分では決めていない「声」に耳を傾けなければなりません。その声をはっきり聞くと自然に他人と一致するようになります。人間は皆同じ人類に属し、同じ家族の者です。互いに責任を持ち、互いに助け合い分かち合うべき者です。この自然の掟は良心の中に書かれています。ですから、それを無

視することは、人間が自分の本質的な要求を無視し、人間であることを止めることと同じなのです。

このようなことを信じて、私は学生に訴えました。遠い国で苦しんでいる人々に関心を持つことによって自分の中に眠っている人間性を育ててみませんか、という単純なアピールでした。オリーブジャパンはそこから始まったのです。

## オリーブジャパンの活動

オリーブジャパンの活動はN G O活動であり4つの種類に分れています。

### 1) 情報

報告書、雑誌、ちらしの作成などを行ない、開発途上国に関しての情報を広げたり提供することによって、その国々の困難な状況や文化、言葉などを知らせます。

### 2) 開発教育

開発教育とは幅の広い活動を示す表現ですが、オリーブジャパンが行う開発教育は開発途上国についての知識を深めるために、先進国で企画される講義や講座です。特に、教育機関内で行われる活動です。

### 3) 現場に派遣するスタッフの選択と研修

オリーブジャパンを通して開発途上国で働きたい人が度々出てきます。その場合には、しばらくの間オリーブジャパンの責任者はその方々と交流しながら目的を確かめます。私たちの目的や理念を理解出来ない場合にはお断りするか、または、他のグループに紹介します。そして現場に行くように指示を受けた人に現地の言葉、文化、法律などを教え、その国で行われる活動の技術的な知識など全般にわたって講習が行われます。

### 4) 資金を集める

N G O活動を行うために資金が必要になります。資金には三つの用途があります。

(1)国内で開発途上国のための色々なイベントを行うため。

(2)国内での事務所の設立、運営資金。活動を続けるための諸経費（専従スタッフの給与、事務所の賃借料、電話料金など）のため。

(3)現場で行うプロジェクトのため。

資金を集める方法は様々で、その団体の創造力によります。

1. バザー、写真展など催しの開催、販売活動など

2. 会員制度

3. 寄付

4. 財団、企業、省庁（郵政省、外務省など）からの助成

## オリーブジャパンが支えている海外プロジェクト

主なプロジェクトは二つです。

1. メキシコのメキシコシティにあるICTE (伊テ - Instituto Cientifico Tecnico Educativo) 技術専科短期大学の設立と運営支持。

2. エルサルバドルのストリートチルドレンの援助活動。

メキシコは近年非常に発展し、近い将来韓国と同じように先進国になるかもしれませんが。しかし、その進歩を外国から入ってくる資金と人材に頼り続けるなら、この国は実際に自立することができないと思います。ここからICTEが生まれました。メキシコ人のインテリアデザイナーや建築家を育て、若い人を自分の国の中で働かせるために専門的な技術を教授します。実際に現在のメキシコでは建築ブームが起きており、その分野の専門家にとっては仕事が見つけやすくなりました。ICTEはインテリアショップも始め、そこで学生は実習もでき、また受ける利益は学校の経済的な支えにもなります。そして、学術講座、売店、パーティーなども行います。オリーブジャパンは資金援助、物資輸送、人材派遣などの協力をしています。

エルサルバドルは内戦が長期化し、約8万人の死者と50万人の難民を出しました。2年前に戦争は終わりましたが、状況はまだ厳しく、街にはストリートチルドレンが溢れています。食べ物も着物もなく、教育も受けず、動物のような生活を送っている子供たちです。私たちのボランティアはまず彼らと「人間」として付き合いします。大人に乱暴に扱われ、利用され、自分の親からも見捨てられた彼らたちの信頼を得るまでには時間がかかります。オリーブジャパンのボランティアはエルサルバドルの現地NGO、カウンタパートであるFUNDIPRO(フンディプロ - Fundacion Divina Providencia)のスタッフと共にストリートチルドレンに食物や着物を与えるだけでなく、彼らと一緒に遊んだり、歌ったり、遠足をしに行ったりします。サッカーチームも結成しました。子供たちがスポーツをすることに熱中するなら、麻薬や窃盗をするための時間がなくなるからです。そして、教育講座も行います。このようにして資金援助、物資輸送、人材派遣を行っています。本年度、オリーブジャパンは郵政省の国際ボランティア貯金の配分金として2,343,000円を受け、首都サンサルバドルの子供たちのために縫製技術指導講座を始めました。その他に愛知県国際交流協会からは500,000円を頂き、現地の女性が自由に利用できるミシンを10台購入しました。

## 結論

オリーブジャパンは若い団体であり、勉強や経験がまだ足りないと思います。しかし、関心と善意があれば人間は不可能に見えることでさえも可能にすることができます。現在、オリーブジャパンには約100名の協力者がいます。2名の日本人ボランティアは現場に行き、有給の専従スタッフが1名、無給スタッフが4名います。そして、協力者の中で、専門家もいれば、専門を持たない人もいます。しかし、自分なりにできることがあればそれでよいと思います。私たちが実現したいプロジェクトはまず病院やダムを建てることではありません。それぞれの国の政府や国連のような大きな組織は、素晴らしくて偉大なプロジェクトを行っています。私たちは小さなプロジェクトを行うことによって、出会った最も見捨てられている人々が、自分も尊厳のあるかけがのない人間であることを意識するように努めています。

## 本年度海外支援プロジェクト

### I. ICTEの図書館増築（メキシコ）：必要資金250万円

ICTEには小さな図書館があり、建築・インテリアデザイン関連の書籍が現在約100冊設置されていますが、今年度からの国際文化学科（東洋文化コースも含む）増設に伴い、関係書籍の充実と図書館の増築計画が立てられています。

### II. ICTEの学生に対する奨学金（メキシコ）：1名6ヵ月分25万円

ICTEに通う生徒の中には経済的に困難な状況にある学生がいます。この学生らが勉強を続けられるように奨学金制度の導入が考えられています。

### III. FUNDIPRO事務所への経済援助（エルサルバドル）：毎月20万円

FUNDIPROの仕事は現在増える一方で、スタッフは事務所を通してストリートチルドレン援助活動、公開講座、資料の印刷等の作業を行っています。仕事の拡大に伴い、現在のスタッフに加えてエルサルバドル人の秘書を雇う必要に迫られています。同時に電話線の増設とコンピューターならびに印刷機の購入予定もあります。現地との情報ネットワークを確保するために、オリーブ事務局にとっても重要な意味を持つプロジェクトです。

上記の支援計画に対するご支援・ご協力をお願い致します。オリーブジャパン会員登録についての詳しい方法は、「事務局だより」のページをご覧ください。また、語学講座やシネフォーラム、バザー等にも是非ご協力、ご参加いただきますよう重ねてお願い申し上げます。

▶ 寄付の振込先 郵便振込口座 オリーブジャパン国際開発協力協会 宛  
口座番号 00890-1-24582

## 本年度上半期国内文化事業

### \* 2, 3月チャリティーディナー：お一人様3500円

昨年ご好評をいただいたイタリアンディナーの第2弾。日程等の詳細は近日中に発表予定です。予約ご希望の方は、オリーブ事務局までお申込みください。

### \* 4月語学講座開校：イタリア語・スペイン語・英語

詳しくは語学講座案内ページをご覧ください。参加お待ちしております！

### \* 6月チャリティーバザー in 城北橋カトリック教会

恒例の初夏のバザーです。4月よりバザー用の品物集めをしますので、今年もご協力よろしくお願い致します。

### \* 8月イタリアスタディーツアー

語学アカデミーのご案内

初級 イタリア語講座

—初級文法がベースの会話レッスン—

毎月第2, 4水曜日 19:00~20:30

講師: 早川準子

ITALIANO

大人のためのイタリア語講座

—イタリア人による実践会話レッスン—

毎月隔週金曜日 19:00~20:30

講師: アンジェラ・ヴォルベ

ITALIANO

初級 スペイン語講座

—小人数制で楽しいレッスン—

\*\*\*\*\*

毎月第1, 3木曜日 19:00~20:30

講師: 吉田シルビア

ESPAÑOL

やさしい英語講座

—話せる英会話習得プログラム—

毎月第1, 3木曜日 19:00~20:30

講師: 桜井芳江

ENGLISH

全講座とも受講期間は1年, 受講料は1ヵ月6000円です。8月はスタディーツアーのため休講とさせていただきますので予めご了承ください。

会場は, イタリア語講座が藤が丘コミュニティセンター, スペイン語, 英語講座が名古屋市東社会教育センターです。

本講座の収益は一部を除いて, 中米エルサルバドルでストリートチルドレン支援活動を展開中の「パウロ三木センター」への支援金とさせていただきます。語学を学びながらストリートチルドレンの支援活動に参加できる当協会オリジナルの語学講座です。語学習得にボランティアという目的がプラスされれば, やる気も2倍にふくらむと思います。

またスタディーツアー参加ご希望の方には3ヵ国語とも活用できる言語になっていますので, いずれかの講座を受講していただけるようお願い致します。



# 活 動 報 告

MEXICO



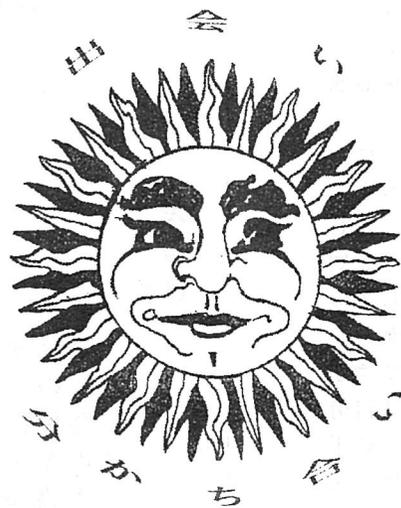
ICTEの創立記念日。ローマ法王庁大使のイタリア人司教様によって祝福がなされました。'95 6月



イタリア人スタッフのパオラ(写真右)とストリートチルドレンの子供(中央)



洋裁講座を開校するためのセンター改装工事 '95 9月



パウロ三木センターで食事をする親子 '95 7月

EL SALVADOR

JAPAN



ICTEの創立記念パーティー。ジョヴァンニ・リヴァ(左上)とICTEコーディネーターのパオリーナ・レオーニ(上段左から2番目)、下段中央で子供を抱いているのがメキシコ駐在の榎原利恵



ホンジュラス人スタッフのマエダ(右端)と娘のエリーザちゃん、左がエルサルバドル駐在の吉見ひかる '95 8月



聖麦祭(名古屋聖霊短大)のチャリティー会場で行われたフォークローレバンドのコンサート風景 '95 10月

「開発途上国におけるパートナーの育成」

—ジョヴァンニ・リヴァ講演会『現地のNGOづくり—将来と展望』より—

開発途上国でパートナーを育成するためには、少なくとも3～4年が必要です。それも支援事業の計画が始まる前にです。このような活動には根気と忍耐が伴われなければなりません。人々と共に生活し、話し、食事をして友人になることで、少しずつ彼らが問題意識を持つようになり、自立して大人であることを確認していかなければならないからです。つまり私たちが自分の国に帰国しても、彼ら自身がそのプロジェクトの理想を自分達のものとして同じ理想に向かって頑張り、その責任を自由に選んでプロジェクトを実行していくのです。このようなプロジェクトは大変苦勞が多く、その過程には長い時間を要します。結果がどう出るかを前もって知ることはできません。

私達の方法は、現地に赴いて病院を建て、後は任せて帰ってくるという方法ではなく、人間関係を一番大切にします。建設とは、ただ建物を建設することではなく、人と人との絆の建設なのです。“ヒューマン・ファクター”が第一だと思います。そうするためには謙遜であることと忍耐が必要です。なぜなら、諦めたくなることがや幻滅してしまうことが山ほどあるからです。しかし、諦めずに新しいスタートを繰り返しながら色々な可能性を発見します。つまり自分が考えた現実と存在している現実が全く違うことを発見するのです。良い意味も悪い意味もどちらも含めてですが、とにかく「違う」のです。

彼らと仕事をする時にはいくつかの点を中心にしなければなりません。第一に若者たちに注意を払うことです。若者はその国の未来なので大切にすべきです。上流社会の若者たちの中にも、正義を信じて何か良いことをしたいと考えている人がいるので、その力を借ります。新しい力を持っている若者と同時に伝統を忘れないことも大切です。例えばお年寄りには多くの知恵があり、経験豊富な方がたくさんいます。彼らも若い頃には色々な夢を持っていたでしょうが、後に人生は辛いもの或いは権力の餌食になるなどして年をとってしまいました。しかし、熱意のある若者と出会うことによって再び自分の熱意を呼び覚ますこともあるのです。ですから、そのお年寄りの方の力を借りて、若い力を伝統の中に働かせます。お年寄りは若者に自分の技術や知識を与えることができ、伝統を守っていくことができるのです。従って、一つのポイントは、若者を自分の伝統の中で育てることです。そしてもう一方では女性たちに着目します。このような国で女性は大変苦しい状況に立たされているので、自分たちの状況を変えたいと望んでいます。ですから協力的でエネルギーを持った女性はたくさんいます。また、自分に代わって現在行っている仕事を任せられる人を探すことです。私が去った後に引き継ぐのは誰か、「この人だったら」と感じた一瞬ですぐ試みることです。私達はこのような活動をしたいので一緒に取り組んで下さい、と即座に責任を感じさせるようにします。同時にそのような具体的な仕事をさせて、その仕事の意味の大きさと価値を説明します。例えば、蜂を飼育して蜂蜜を作りたいとします。しかし、自分の民族には蜂蜜だけが必要なのではなく、生きる目的が必要なのです。ですから、その人が具体的な苦しい仕事を通して、全体的な意味を理解するように育てるわけです。そこが最も難しい点です。このような仕事の質の飛躍を私達の国の諺を借りるなら「大理石を噛む」と言います。つまり歯が折れるほど困難だということです。

もう一つの大切なポイントは「人間性」と「信頼」です。パートナーに出会うとすぐに格好の良い話がしたいものです。自分を幻滅させてしまうことや間違いは言いたくありませんから。そして相手も同様に格好の良いことばかり言うのなら、嘘のつき合いになってしまいます。そのようなことを恐れなくて、自分のことを正直に相手に見せ、相手も同じ態度で向き合い、本来の姿から始めることが大切です。人間としての深みを互いに築くことです。私と相手の間の

一致を目指しながら、共に真面目で嘘なく働くことができる環境を作ります。このような一致は、すべての人間との一致の象徴のようなものにはなりません。例えば資金がすべて断られ、借金は山ほどあり、ボランティア達はその状況に幻滅して去ってしまっただけで最低な状況の中に置かれても、何度も頑張ろうとスタートを試みるという人間性を深めていくことです。すべてを失ってしまったとしても、その人間性の深さや人間関係の太さが残るのなら大丈夫です。大切なのは、パートナーも私達も学ぶ心を持たなくてはならないということです。自分と相手の限界を許し、同時にお互いの可能性を活かすことです。相手の文化を愛すること、つまりその文化を愛するための精神を養うことが大切です。もちろん、この過程は非常に長い道程です。しかし、長いということは少しずつ行われるということです。責任も少しずつ任せます。例えば、突然に34万円を渡して使って下さいというようなことでは大変なことになってしまいます。自分たちで勝手に使ってしまうないように「今年は50万円を与えます」と渡してから「こういう目的のために使って下さい」と指導します。その次に100万円を渡し、前の50万円がどのように使われたのか報告を聞きながら打合せをしていきます。パートナーは、少しずつ任されたことを自分の役目として考えていかなければならないのです。私達は自立し、これは自分達がやりたいことだという考えに至るまで意識を運んでいくのです。ですから私達の仕事は資金を集めて現地へ赴いて何かを建てて帰ってくるではありません。それはまだ簡単なことです。私達は「技術中心主義」ではなく、人間が人間として扱われる人間関係を求めます。これは教育的な過程です。この過程は非常に長い道程です。優越感あるいは自分の民族を中心にして人を上から下へ見下すこと、そのような差別的な過程ではないのです。本当に平等な立場でパートナーと共にいることが大切です。同時に教育的な過程の中で大切なことは、彼らのやる気を育てることです。私達だけではなく、彼らにも汗を流しながら頑張ってもらってこそ、共に喜びを分かち合うことができるのです。このような理念を持つと、3年間の間に実現させたかったプロジェクトに実際は10年の年月を要するでしょう。しかし、それでもよいと思います。パートナーとの間に良い関係が生まれて、彼らが自立するようになり、私との友情を大切に自分も国のために働くことを希望するようになるからです。そうしないなら、私達はお金を持っている人「ロス・グリーンゴス・コン・ラ・プラタ（お金を持って来たアメリカ人）」がやって来た、もしくはサンタクロースのような存在として扱われてしまいます。そうならないように一緒に汗を流し、教育しながら活躍しなければならないのです。そうすることで彼らは、ただ待つだけで誰かが助けてくれるという浮浪者的なメンタリティーから解放されます。つまり、自分が人生の主人公になるということ、政府や権力を持った人々からすべて与えて貰うことを願わずに自ら頑張るということです。これをパートナー達に教えなくてはならないのです。

## オリブジャパン小冊子「講演会シリーズ」のご案内

オリブジャパン発行の講演会冊子（全5巻）リストを掲載します。ご希望の方は、事務局までお気軽にお申し付けください。定価は各500円です。

- 1 人間の尊重のための無償の心～エルサルバドルの経験を終えて～
- 2 出会い・分かち合い～中南米における教育と援助活動
- 3 中南米における人間の尊厳と女性の立場
- 4 現地のNGOづくり —— 将来と展望
- 5 人生の賭け —— すべてのことに意義はあるのか、意義はないのか

（\*シリーズ5はただ今製作中です。）

好評発売中!



## 【エルサルバドル派遣 吉見ひかる】

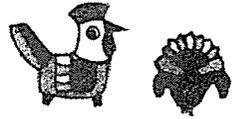


私がエルサルバドルに初めて行ったのは学生時代でした。アンジェラ先生の友達がそこでボランティアをしていたことを知って、行ってみたいと思ったのです。本当はずっとフィリピンでボランティアをしかったのですが、結局エルサルバドルになったことを不思議に思います。とにかく、一ヵ月でした。私が行った当時はまだ内戦下でしたが、人々は優しくて明るかったです。自分の家にでもいるような気がしました。言葉が出来ず、技術を何も持っていなかった私は、まず最初にその文化を知るという仕事をしました。やはり、ボランティアをしたいのなら、活動したい国の言葉と文化をまず知ることが大切です。日本に帰国して卒業後、聖霊短期大学で助手として2年間努めていました。その間にオーリーブジャパンを通してボランティアを続けました。必要なときに必要なことをしました。オーリーブジャパンのスタッフと一緒に公開講座、バザールなどの準備をし、会員を探して現場で行うプロジェクトのために資金を集め、スペイン語と英語の勉強もしていました。去年、立正校成会の奨学金を受け、再びエルサルバドルへ来ました。6月から“ドムス・クラウディア・グリニャーニ”に住みながら、フンディプロの手伝いをしています。“ドムス”とは国際家です。そこで私以外にイタリア人女性1人とエルサルバドル人の女の子が3人住んでいます。共同生活です。根本的なルールは1つだけです。思いやりを持ってすべてを分かち合うことです。ジョヴァンニ先生がこの家を始められた理由は、エルサルバドルの貧困で困っている若者に人間として平等な扱いが与えられるためであると思います。カルメンとその2人の姉妹は私達と一緒に住む前には、道で生活したり、孤児院に入れられたりと辛い思いをたくさんしていました。今、彼女達は普通の女の子の生活に戻り、勉強したり、家で手伝ったりしてしています。経済的に“ドムス”に住んでいる私達は、皆で協力します。カルメンたちは非常に貧乏なので少ししか出せませんが、大切なのは「自分は乞食ではない」という意識を持つことだと思います。つまり、彼女達も同じ人間として頑張ることができるということです。私はエルサルバドルの人達を助けに行ったつもりですが、実際に助けてもらっているのは私であるような気がします。もちろん、オーリーブジャパンとフンディプロのスタッフの一員として山ほどの仕事があります。洋裁講座、ストリートチルドレンの援助活動、サッカーチームの活動、事務所の仕事などありますが、毎日一番勉強になるのは私自身です。自分の限界と欠点を受け入れること、他人をそのまま受け入れること、他文化の前で威張らないこと、子供のような学ぶ心を持つということ、そして謙遜に「よろしければお手伝いします」と頼めるようになることをエルサルバドルで習っています。

## 【メキシコ派遣 神原利恵】

私は去年の9月からICTEでボランティアとして働いています。英語と日本語、日本文化を教えながらICTEの学生のために日本への留学を考えたり、日本からICTEに学生を呼んだりする仕事もします。正直に言うとメキシコに来てメキシコ人と付き合い始めた時、「何だこれは！」と思ったことがあります。時間や約束を守らない、嘘を言う民族じゃないのかと私は何度も怒りました。しかし、私のポスのイタリア人女性パオリーナ・レオーニは私にこう言いました。「あなたは日本人だから日本のやり方が最も正しいと考えるのは当然です。しかし、メキシコ人は自分のやり方を持っています。なぜあなたは彼らに自分のアイデンティティーを持つ権利を認めてあげないのですか」と。その言葉に考えさせられました。人間は皆それぞれの考え方を持っています。私はその違う考え方を理解しようとしていなかったし、すべてを偏見によって決めていました。だから頑張ってみようかと決めました。人間はそれぞれだからこそ良い目的を持って一致できるのではないのでしょうか。もし、皆同じものだったら「一致」する必要がないでしょう。白と白と白が重なっても白に過ぎませんが、白と赤と緑などは違うからこそ一致すれば虹ができます。互いに持っている違う良いところを交換したり、互いに欠点を許したり許してもらったりすることによって本当の人間関係が生まれると思います。



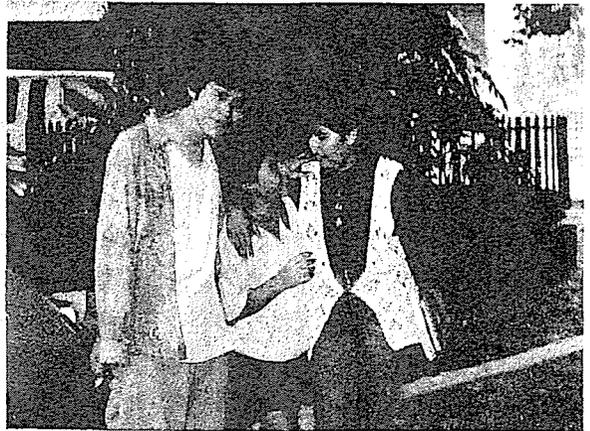


### 【エルサルバドル派遣 市川隆之】

私は昨年約3ヶ月半にわたってエルサルバドルに滞在し、パウロ三木センターの活動に参加することができました。パウロ三木センターとはサンサルバドル市内の中央公園で生活する女の子たちのための家です。月曜日から金曜日の午前11時から午後4時の間、いろいろな事情で公園でくらすようになった15歳から20歳くらいの女の子達が自由に来ることができ、昼食を食べたり、シャワーや洗濯をすることができます。そして、その時間を一緒に過ごすなかで、彼女たちと話し合うことがセンターの目的です。彼女たちは夜、公園でホットドッグの屋台などを手伝っていますが、危険から身を守るために「マラ」と呼ばれる暴力的なグループに属さなくてはなりません。いくつかある「マラ」の間には抗争があり、そうしたものに対する恐怖心や、現実から逃れるために麻薬を使うようになります。またグループ内での暴力や、危険なものとしてしか扱わない「市民」の視線によって、彼女たちの心はとげとげしいものになりがちです。したがって、その心を少しでも落ち着かせる場所が必要です。

最初は彼女たちとどのようなコミュニケーションが取れるのかという不安がありました。しかし、これまでのセンターの成果だと言えるのですが、驚くほど心を閉ざすことなく私を受け入れてくれ、彼女たちの優しい心づかいにも触れることができました。支援する者とその対象になる者といった関係ではなく、本当の友人として出会えたということが良かったと思います。

また、毎週水曜日に皆で遠足に出かけるのですが、その時に家の中とは違った彼女らの表情を見ることができました。センターの中での限られた時間しか一緒に過ごすことはできないのですが、やはり、彼女たちの夜の生活は厳しいもののようです。毎日3時になると公園に帰る支度をしなければなりません。そこで彼女たちは化粧という武装をして次第に日つきも変化します。日産のピックアップで送ることもしばしばありました。一緒に荷台に乗ると、カーブの時などに大声をあげたりというあどけない表情と、不意に遠くを見つめて何かを考える顔つきが日に入りました。本当に純粋な心を持った少女たちが、構造的に生み出された様々な状況によって町の中での生活を強いられているということに対して支援の必要性を感じました。今回は短期間で、最初の出会いの段階でしたが、実体を伴わない“ストリートチルドレン”という言葉が、実際に一人一人の顔として立体的に感じられるようになりました。友人を通して出会い、彼女達のおかれている状況に触れ、それに対する取り組みをする、という自然なつながりの中で、日本に帰った今も友人たちにこの活動を紹介していく必要があると思っています。そして、また再会できる日までのステップアップにしたいと思います。



隆之、カルメン(FUNDIPROスタッフ)と友達になったストリートチルドレンのエドウィン

### ——— 南米からのお願い ———

現在、メキシコのICTE技術専科短期大学への寄贈図書を集めています。必要とされている書籍は、インテリア、建築関係の専門書、図鑑、百科事典、ビデオ等で、スペイン語、英語で書かれているものです。また、日本語学習のための教材、カセット等。後日、船便での輸送による寄贈を考えていますので、お心あたりの方はご連絡下さい。ご協力よろしくお願いします。オリーブ事務局0561-85-2056



# スポットライト

オリーブジャパン会員紹介コーナー

interview



愛知県瀬戸市在住 根本 啓さん

根本さんは、オリーブ発足当初からの会員で、学園職員をしておられる62歳のとてもステキなおじさんです。写真の代わりに左の自画像を送っていただきました！

## ●オリーブの会員になった動機は？

改めて問われると、はてなと考えてしまうのですが多分次のような事だったと思います。私たち夫婦共々お陰様でどうか健康で60歳を越え、2人の子供もそれぞれ結婚し家を出て、親としての責任

はどうやら果たせました。これは多くの人々のお陰だったと思います。今度は私たちが何か他人のためにする番だと日頃思っていた折り、私の身近な人がオリーブ（当時AALMA）の活動を熱心に従事されているのを知り、これに少しでも協力できればと思ったのです。50年前の日本は戦争に負けて、食べる物もなく街々には浮浪児（ストリート・チルドレン）が溢れていました。そこに米軍のジープがやって来てDDTを頭からかけて回っていた光景を私は忘れることが出来ません。日本が今日このような豊かな姿になるとはとても想像できませんでした。これには多くの人々の援助があったと思います。今度は私たちが何等かの形でそれにお返しをする番だと思うのです。私たちがそれぞれ自分の出来る方法や範囲で、毎日少しずつでも何か他人のお役に立てればと思っています。これからボランティア活動をするんだ、と構えなくても、皆が朝起きて顔を洗って朝食をとるように、日常生活のひとつの動作の中でボランティア活動に参加できればと思っています。私達夫婦は現在オリーブへのささやかな協力の他、郵便局のボランティア貯金をしたり、ECUADORの子供のフォスターペアレント（里親）をしています。多くの人々が無理のない範囲で他人を思いやれば、その力は大きなものになると思うのです。豊かさの裏には必ず貧しさがあることをいつも忘れたいと思っています。

## ●今後のオリーブの活動に関するご意見・ご希望は？

私達の小さな協力や僅かな援助を、スタッフの方々がベストと考える方法で生かしていただければそれで良いと思います。現地での援助活動の状況が、写真やビデオ等でもう少し知ることが出来ればありがたいと思います。最後にスタッフの方々のご健康をお祈りします。

貴重なご意見、本当にありがとうございました。根本さん始め多くの会員の皆さんの温かいご支援に励まされ感謝の気持ちで一杯です。会員の皆様のご要望にもお答えできるよう今年も頑張りますので、ご協力よろしくお願い致します。

# 事務局だより

## 会員キャンペーン

### 【会員登録のご案内】

オリブジャパンの活動は、主に会費や寄付金、文化事業等によって支えられています。当協会の活動趣旨にご賛同いただける方には、会員登録をお願いしています。登録手続きについての詳しいお問い合わせは、オリブ事務局まで。

賛助会員（月会費）10,000円  
 正会員（"）5,000円  
 協力会員（"）2,000円  
 参加会員（"）1,000円  
 同調会員（"）500円  
 \*年会費として一括払い可

### 【寄付のお願い】

寄付金は随時、下記の口座で受付を行っておりますので、ご協力よろしくお願い致します。

郵便振込口座番号

00890-1-24582

名義 オリブジャパン国際開発協力協会

### 【お問い合わせ】

〒462

名古屋北郵便局私書箱24号

オリブジャパン

TEL 0561(85)2056

FAX 0561(85)2056

## 96年度年間予定

- 4月 語学講座開校（伊語、英語、スペイン語）  
 6月 城北橋カトリック教会バザー  
 8月 イタリアスタディーツアー  
 10月 聖麦祭（聖霊短大学園祭）バザー  
 その他 シネフォーラム（隔月）  
 チャリティーディナー  
 メキシコ語学研修プログラム  
 フリーマーケット  
 講演会など

## 1994年4月～1995年3月 決算報告

項目	収入	支出
会費	503,000	
寄付金	748,775	
文化講座収入	741,000	
広報事業収入	1,024,021	
販売	89,560	
雑収入	913	
パウロ三木センター支援金		2,080,800
備品購入		143,001
消耗品購入		59,676
通信費（海外含む）		285,789
雑費（写真現像代等）		130,056
広報事業活動準備費		251,100
印刷費		424,445
賃借費（講座会場費等）		88,263
前年度繰越金	474,601	
次年度繰越金		118,740
合計	3,581,870	3,581,870

OLIVE PRESS vol. 1 定価 ¥300

【代表】 アンジェラ・ヴォルベ 【編集】 早川 幸子

【発行】 オリ・ブジャパン国際開発協力協会